法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-09

琉球の方言 1巻 : 八重山石垣島川平方言

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
1
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
102
(発行年 / Year)
1975-09-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012852

1. 川平方言の主な特徴

(1) 母音は i ï a u e o の6母音である。

例　iri（射る）　ïzu（魚）

Fu̥sï（臼）　an（網）　udi（腕）

Fu̥kke:run（浮かぶ）　so:（竿）

川平方言と共通語との単母音の対応関係はほぼ次の通りである。

川平	ï	i	a	u	
共通語	i	e	a	u, o	

(2) 中舌母音のïはiかuへ変化しつつある。ïは比較的にs・c・zの後では最後まで残る傾向にある。また，ïは語によって，個人によってもゆれており，たとえば，kakïn（書く）は kakun，turïn（取る）は turun のようにもあらわれる。

(3) 語頭母音は無声化して摩擦音を伴なうことが多い。

例　hḁka（赤）　hḁtu（跡）

çḁta（板）　Fu̥sï（牛）

Fu̥kirun（起きる）

この現象は，八重山では川平方言だけに観察される。沖縄北部の一部の方言にも同様な現象がみられる。

以上のほかの頭母音には，音声的に？があらわれる。

(4) 無声子音と無声子音とに狭まれた母音が無声化する現象は，多くの方言でみられるものであるが，川平方言では，このほかに無声子音と入りわたり音が無声化したm・n・rに狭まれた母音も無声化する。入りわたりの部分が無声化するm・n・rは ^{h}m・^{h}n・^{h}r のように表記することもできるが，ここでは簡略にm̥・n̥・r̥のように表記することにした。

例　sï̥ta（下）　Fu̥ʃi（癖）

kï̥mu（肝）　ʃu̥mutsï（書物）

pḁna（花）　pḁni（羽）

pḁra:（柱）　tu̥ra（虎）

(5) カ行子音はkであるが，クに対応するものは Fu である。

例　kai（影）　ki̥tsï（傷）

Fu̥sa（草）　Fu̥tsï（口）

ki:（毛）　ku:（粉）

また，キに対応する sï もある。

例　sïkï，　sïkïn（聞く）

(6) ハ行子音はpであるが，フに対応するものは Fu である。

例　pa:（葉）　pï̥sï（日）

Fu̥kasa（深い）　Fu̥ta（蓋）

pï̥ra（鏘）　pu:（帆）

(7) 語中のgが脱落する。

例　kui，ko:n（漕ぐ）　tui，to:n（研ぐ）

(8) 動詞の終止形としていくつかの形があらわれる。

例　kakï，kaki:，kakïn（書く）

連用形と同じ形が，このように終止形としても用いられる。これは宮古方言とつながるものである。

(9) 係助詞 du（ぞ）が多用される。

例　uwa du　turu（君が取る）

imi du　me:ri（夢を見る）

(10) 上・下一段活用の動詞に相当するものはラ行四段化の傾向にある。

例　kiranu（着ない）

Fu̥kiranu（起きない）

Fu̥kiranu（受けない）

(11) 形容詞は takasa, takasan（高い）の形と, kaiʃa, kaiʃan（美しい）の形とがある。これは, ほぼク活用とシク活用との区別に相当するものである。